

フィールドワーク・隠岐四島めぐりから

2012年8月3～5日、科教協全国研究大会が鳥取支部および近隣支部の共同作業で行われた（鳥取大会）が、わたしたち6人は隠岐諸島のうち四島と大山のフィールドワークをした。堀雅敏さんは今回の全国研究大会前に隠岐四島めぐりを実施した“まとめ第1弾”として写真アルバムを報告した（その後改訂された）。わたしはビデオで報告しようと思う。まず「知夫里島を訪れて」（14分）を作った。



隠岐諸島の位置と四島の様子(観光パンフレットから)

島根県隠岐四島巡りでは、“隠岐ジオパーク”に魅了された日々であった。まず、はじめに訪れた環境の激変している知夫里島の様子は強烈な印象が残った。

7月30日朝6時50分羽田空港発、8時5分米子空港着。空港から七類港まで行き、9時30分七類港発・フェリー「くにが」乗船というスケジュールがよかったと思う。知夫里島来居港まで2時間費やした。その間、なかまのみなさんは、それぞれの時間を楽しんだ。わたしは島を回るレンタカーに乗る前に古傷が残る左足首の捻挫をしてしまった。先年、1回目の足尾鉾山方面に行ったときも、その数日前の捻挫で歩行が不自由となっていたから、十分な歩きはできていなかったが、今回も同様な経験をする事になるだろうと諦めた。

知夫里島の赤ハゲ山頂は標高が325mで、展望台からは火山島の歴史を見ることができた。眼前の海の向こうの中ノ島・西ノ島を眺めながら、海がカルデラ（湖ではない！海！）、中央火口丘は焼火山（452m、西ノ島の最高峰）であるというのが納得できた。歩いたのは随分昔のことになるが、北海道樽前山の火口丘の様子を思い出した。

「牧畑」について学んだ。牧→畑→牧→畑という繰り返しの土地利用では、畑ではアワとヒエ、ダイズやアズキ、そしてコムギとオオムギというような作付けの中身を変えての4年を1サイクルにした輪作が行われていたという。これには、知夫里島を居住地の他に4区分した土地利用をずらしてウシを移動させていることがあり、このサイクルで実施してきたのだというから、うまい利用法と感じながらも、そのために森林は育たなかったと思った。実際、草原地帯が圧倒的に多い。

放棄したと思われる農耕地跡を見た。放たれたウシは海岸から山頂近くまで居て、草を食んでいた。昔、村長が島に持ち込み、飼育していたタヌキが脱走して繁殖し、今では2000頭を超えているのだと言う。何とかしよう、という声が大きくなって、ついに撲殺して減らそうという駆逐策で村民にひんしゆくをかってしまい、現在は無策のままになっているようだ。自分の眼で確認したものはタヌキ、キジ、ウグイス（鳴き声）、トビくらいで多くない。植物では映像で紹介した程度である。宿泊先の様子を除くと、民家のたたずまいを確認しなかったし、まちの人の声を聞くこともなく一日が終わったという感じである。<鷹取 健>